

事務所：(160) 東京都新宿区百人町3-23-1 国立科学博物館分館内  
電話 = (03) 364-2311 振替 = 東京 1-6599

## ◎ 日本鳥学会70周年(仙台)大会を終えて ◎

昭和57年11月21～22日に日本鳥学会昭和57年度大会が、宮城県仙台市で開催された。今回は日本鳥学会創立70周年記念大会も兼ねていたが、記念大会を成功させようという会員諸氏の熱意が通じ、今までの大会に見られない盛況な大会となった。

会期中、一般講演、総会、特別講演、シンポジウムおよび初企画のポスター形式発表が行なわれ、翌23日には伊豆沼でのエキスカージョンが行なわれた。演題数は一般講演36題、特別講演1題、シンポジウム4題、ポスター17題であった。これらはいずれも例年になく多く、特に一般講演はここ数年20題前後だったが、倍近く増えたため二会場同時進行という形で行なわれた。参加者は124名(会員75名、非会員49名)におよび、地元の東北地方や今まで参加者の少なかった関西地方や長野県など広範な地域からの参加が見られた。

以下大会を準備した者の立場から、大会の紹介と雑感を述べてみたい。大会参加者、講演数ともに予想外に多かったのは嬉しい誤算だった。そのため一般講演は急ぎ二会場同時進行にせざるを得なくなった。そのために聞きたい演題が重なったり、各会場での進行状況が多少異なったりしたために、十分演題を聞くことができなかったという不満の声も聞かれた。この点については大変申し訳なく思っており、今後の学会では御配慮下さるようこちらからもお願いしたい。

特別講演は新種ヤンバルクイナの発見者であり、今年度の鳥学研究賞を受賞した真野徹氏が、ヤンバルクイナについて行なった。日本で新種が発見されたのは数十年ぶりのことである。

シンポジウムは「日本におけるガン類について」という内容的には漠然とした題のもとに行なわれ、横田が分類を中心とした総論を、西出・小野両氏がマガンについて主に渡りの問題を、最後に呉地がヒシクイとオオヒシクイの生態的な問題について述べた。このシンポジウムは内容・

## ◎ 58年度大会のお知らせ ◎

昭和58年度鳥学会大会は、9月17日(土)～18日(日)に、東京大学で行なわれます。一般講演(研究発表)の他、ポスター展示、シンポジウム(題未定)を予定しています。詳細は追ってお知らせします。今から御準備を。

構成ともに不十分だったと思うが、シンポジウムをこの大会を特徴づけるものにしたという考えがあったため、ガンのシンポジウムを行なわせていただいた。この点御理解いただきたい。

ポスター展示は今回初めての試みだった。そのためどの位のポスターが集まるか不安だったが、予想より多くが集まった。今回は用紙の大きさだけを統一し、内容については出品者に一任した。実際に展示をしてみると、内容・形式など改良の余地が多くみられた。一方この企画を通じ、演題は出せないがポスターなら参加するという会員がいることも判った。ポスター展示は以下の点でよい企画だったと思う。

1. 大会の雰囲気が多様化し、より多くの人が参加できる場が提供された。
2. 共通のテーマを持つ者が時間的制約を受けずに十分討論することができる。

懇親会は会場内の食堂で行なわれた。できるだけ多くの人と親交を深めることができるよう配慮し、立食形式とした。またこの席で新入会員の紹介が行なわれた。これは良い試みで、新入会員の人たちが話に参加するきっかけになったようだ。

懇親会のあと、ポスター会場を利用し、有志による「極東鳥類研究会」の会合が持たれ、同会が正式に発足した。この会は同年8月モスクワで行なわれた国際鳥学会に参加した藤巻裕蔵氏などが中心となり、ソ連との鳥学上の情報交換、共同研究を第一の目的としたものだ。その第一歩として研究者リストの交換などが行なわれることになった。今後ソ連との国際交流が実現するようになれば、日本の鳥学研究者にとって得るものは極めて大きいと思われる。

大会終了後、エキスカージン参加者はバスで伊豆沼に向った。参加者も多く、大型バスがほぼ満席になる状態だった。宿舎となった伊豆沼観光センターでは旅館の手違いで食事時間が遅れ、参加者の方には御迷惑をかけてしまった。夕食には特別メニューとしてヒンの実を殻のまま出してもらった。ヒンの実を知っている人は少数で、食べたことのある人はごく限られた人だけだったようだ。両端に鋭い刺があるため、これをガンが好んで食べることを納得できない方々もあり、ついにヒンの実採食法の実演までやらされるはめになった。

翌朝は5時に起床し、伊豆沼からのマガンの morning flight を観察した。伊豆沼西部の獅子ヶ鼻地区には約3,000羽のマガンとハクガン1羽がおり、マガンとともに飛び立ったハクガンは我々一行の頭上を通過し、間近かにハクガンの飛ぶ姿を見ることができた。そのあとマガンの採食地水田などを観察し、再び伊豆沼でシジュウカラガン、ハクガン、カリガネなども観察し、正午に現地解散した。

最後に昭和57年度大会全体についての印象と、今後の学会への要望を述べたいと思う。既に

● 仙台大会記念写真、ご希望の方は下記へお申込み下さい。●

エキスカージン後、伊豆沼畔で撮ったものです。白黒です。60円切手をはった返信用封筒に住所・氏名明記の上、別途写真代として40円切手同封の上、お願いします。

〒167 杉並区善福寺3-5-10 川内 博

述べたように、今回はかつてないほど参加者・演題数ともに多かった。このことは鳥学会にとって嬉しいことで、会員諸氏の努力が形にあらわれたものだと思う。見方を変えるならば、今の鳥学会には今度の学会に示されたようなかなりの潜在力があると言っていることができるだろう。鳥の研究は鳥学会がその中心となり、他の関連する学会等と関係を持ちながら行なわれるのが鳥学発展にとって最も理想的な形だろう。しかし今までの状況は残念ながら理想とはかなりかけ離れているのが現実であろう。今年の大会が一つの契機となり、鳥学会が大きく飛躍することを期待したい。具体的な問題としては、より多くの方が学会に参加し、演題等を出し、学会の基盤をさらに大きくするよう努力し、まず量的拡大を行なうことが必要だろう。これがなければ学会全体の質的向上も十分には果たせないと思う。特にアマチュア研究者が多い日本の現状を考えるならばこの問題は重要だと思う。質的な問題については、現在第一線で活躍されている諸氏が、学会誌「鳥」への投稿を積極的に行なうことが必要であろう。それと併せて大会に演題を出した会員が、それを論文にまとめ「鳥」に投稿するよう努力するならば、現在のような慢性的な原稿不足は解決されると思う。

(呉地正行)

## ◎ 仙台大会・エキスカージョンに参加して ◎

学会に初めて参加させて頂き、センサスの方法論から個体識別、分類から生態等多分野に渡る二会場分散形式の発表には、私自身消化不良が多く残念に思う。その中で数そのものに解釈を求めていくと思われるコンピューター処理の方向に特にとまどいを感じた。

11月23日 耳には地元の方々の保護の情熱を残し、天候を気にしながら6:00 伊豆沼畔にマガンの群をのぞく。一羽のハクガンは印象的であった。6:40 餌場への飛び立ちを頭上に見る。プロミナーをのぞきながらオオハクチョウの個体識別が嘴の四面からの黒と黄の模様の組み合わせより可能な事を菊地氏からお聞きし、困難さを想像する。10:30 シジュウカラガンと共にマガンの中のカリガネを教えられ、話が実感となった。ハクチョウの餌付の迫間川、マガンの餌場の金成耕土、内沼も見せて頂いた。

最後に本大会を支えて下さった実行委員長の横田義雄氏他の方々に厚く感謝を申し上げる。

(長野県・水内エツ子)

### ● 鳥の出版予定について ●

前回の通知で、「鳥」第31巻2/4号は合併号として出版されることをお知らせしたが、その後に原稿の見込み、印刷所のスケジュール、その他の事情を考慮した結果、2/3号と4号は切り離し、2冊を同時に出版することとした。この原稿を書いている時点では印刷所の予定をはっきりつかむことは困難だが、2月末にこの「ニュース」と「鳥」2冊をお手許に届けたいと思っている。

(森岡弘之)

## ◎ 「極東鳥類研究会」発足 ◎

日本鳥学会の会員には、日本以外では周辺の国々の鳥類に関心を持つ人は少なくない。とくに渡り鳥を研究対象としている人はそうであろう。1982年8月にモスクワで第18回国際鳥学会が行われ、日本からも7名が参加した。学会開催中に参加者は各自関心のある問題について各国の研究者と情報の交換を行ったが、その一環として、日本とソ連極東の研究者11名が会合を持った。

会合では、各自が現在行っている研究テーマや関心をもっている問題について話し合い、今後の研究交流について意見を交換した。1973年に結ばれた日ソ渡り鳥条約(まだ批准されていないが)にも研究交流をすすめることがうたわれている。これまでに、わずかではあるが両国の研究者の共同研究活動が始まっている。仙台の学会でも須川恒氏とH.H.ゲラシモフ氏(カムチャツカ半島)によりユリカモメに関する共同発表が行われた。また最近ソ連科学アカデミー極東学術センター生物・土壌研究所が2冊の論文集、「極東の稀少鳥類」、「東アジアのツル」を出版したが、これにアメリカや日本の研究者(正富宏之 柿沢亮三、藤巻裕蔵)の論文も含まれている。

このような実績にもとづき、参加者は今後とも鳥類保護のために各種の情報や文献の交換など研究交流を進めることの必要性を確認した。とりあえず両国の研究者と研究分野、テーマのリストを交換し、これにもとづいて各自が文献交換を行う約束をした。

研究交流を今後継続するのに、日本側の態勢をつくる必要があるため、先日仙台で行われた鳥学会大会の際、有志が会合をもち、「極東鳥類研究会」を発足させた。世話役として藤巻があたることになった。この時点での会員は30名である。

研究会の活動として年2回くらいニュースレターを発行し、研究者リスト、文献の紹介を行う。このほか研究会として学術雑誌や論文集などの文献交換を行う。なおロシア語文献の利用は日本の研究者にとって困難なので、日本の雑誌に論文を投稿してもらうことも考えている(この場合和文または英文にする)。さらに将来は人の交流もできるよう努力する。

このような研究交流に関心のある方は、ぜひ研究会に入会していただきたい。申込先は、〒080 帯広市稲田町帯広畜産大、藤巻裕蔵 気付、極東鳥類研究会。会費は年1,000円、会費の送金には郵便振替(小樽1-12137、極東鳥類研究会)を利用されたい。(藤巻裕蔵)

## ◎ 記念講演会のことなど ◎

日本鳥学会創立75周年を記念する事業のひとつとして、昨年5月12日に東京で講演会が開かれた。そのときのあらまは、鳥30巻4号に署名記事でまとめておいた。その記事を書くことで、講演会担当幹事としての仕事は終りと思っていたが、唐沢孝一幹事が「学会ニュース」にもっと何か書けという。それも、しつこく。で、会直前のことなど思い出しながら、少々書き足してみる。気楽に読みとばしていただきたい。かく申す私も、ベッドの中で鉛筆を手にしている。

開催は前年(1981)3月の評議員会で正式に決まり、4月には講演者お三方との交渉も終っていた。7月に会場探しを始め、新宿駅前の安田生命ホールに決めた。バードウィークの初日

(5月10日)をと考えていたが、講演者のひとり青柳昌宏さんが、その日だけ少々不都合がありそうとわかり、会場のあいている5月12日に、日取りも決まった。

毎月1回の幹事会でも、この件に関しては特に議論することもなくなった。ただ森岡弘之幹事だけは、何かもっと準備することがあるのではないかと時にやきもきしていた。

ひとつだけ、決まっていなかったことがある。司会者のこと。年を越して3月の幹事会での話題にもなった。適当な人がいなかったら自分でやればいいのか、という気もあったので私は別にあせらなかった。ただ、どうせなら、たとえばテレビの美人アナに頼もうよ、という強い希望が、川内博幹事あたりから出た。皆も勿論賛成した。「田丸美寿々か頼近美津子」、「宮崎緑もいいよ」と私。「えっ、そんな人たちと、知り合いなの?」と樋口広芳幹事。知り合いな訳ではない。ブラウン管を通して、こちらが一方向的に知っているだけだ。でも、こういう機会に知り合いになるのは大いに結構。日本鳥学会幹事という肩書きつきの名刺を作って、と。

4月の幹事会前に、協賛をお願いしていたサントリーから快諾する旨の連絡が入った。しかし、どうやら美人アナの件はあきらめなければならないらしい。福田道雄幹事の調べで、かなり多額のお礼が必要と分かった。大学のクラブにあたれば、いい人が見つかるだろうとも。伝統があるのは早稲田、カワイコちゃんが多いのは青山と上智とか。関係団体に、誌上での広報をお願いした手紙を出した以外、このことも含めてしばらく放っておいて、最終的な準備にとりかかったのは、ゴールデンウィークが終わってからである。

5月6日、前夜書き上げたプログラム原稿を印刷所に渡し、講演者の中坪さんと柴田さんを訪ねて、時間などを確認。7日、新聞社と放送局あてに広報依頼の文書を出してから、会場の設営の打ち合わせを済ませ、夜の幹事会に臨んだ(ここ2、3年は、唐沢さんの勤務先である両国高校で開かれる)。吉井正副会頭も出席して、当日の担当を決めた。写真・録音担当になった川内さんが、舞台上に、大きな掲示が欲しいという。それがないと写真にならない。なるほど。森岡さんが難題をひとつ持ち出した。参加者が殺到して、入れない人が出たらどうする? 中坪さんやサントリーの人もそれを気にしていた。定員は400人弱。私としては経験から、いいところ200人、多くて300人という自信(?)があったが、森岡さんの所には電話での問い合わせが数件あったという。8日、留守の間に早大の学生と名乗る女性から電話があったという。しめしめ! いろいろ考えて、早大の放送研究部に手紙を出しておいたのだ。あくまでうら若き美女のさわやかな声で司会をしてもらうのがこちらの望みだった。どら声や髪油べったりの猫なで声はごめんこうむりたい。そこで、手紙を書くのに苦勞したのである。そのかいがあったらしい(あとで美女が語るに—あの手紙は大受け、部室で大声で読み上げて、みんなで大笑いしました)。

9、10、11日と毎日3時間かけて、会場に貼るポスターを画いた。満員になったときのお詫びのポスター2枚は、書とゴルフとバードウォッチングが趣味の義兄に書いてもらった。11日夕方、早大放送研の神戸(ごうど)いずみさんと初めて会って打ち合わせ。粗原稿を渡し、服の色とコサージュの色を決めて別れた。珍しい姓ですね。

当日は考えることはなく、ただ歩き回るだけ。赤坂見付のサントリーから、映画フィルムと同

社制作の鳥のノベルティーを預り、会場へ。講演者や幹事がつけるリボンなどを近くの京王デパートで買い、緋色のバラのコサージュを注文して一服。サンドイッチ、牛乳などを数人分求めコサージュを受けとって、また会場へ。幹事諸氏と最後の確認をする。急用で遅くなるかもしれない、と連絡のあった青柳さんも、予定より早く到着。授業は休みたくない、といていた神戸さんは予定より遅く、ちょっと心配になり出した頃、顔をほてらせて駆けつけた。いつも早目に切り上げる教授が、どういう訳かこの日はのりにのって時間をオーバーしたとのこと。ひと息入れてから、鏡の前で発声練習が始まった。

翌日夜は、仙台市の会員横田義雄さん、森岡さんと3人、新宿で落ち合い、食事をとりながら、仙台での大会のこと、シジュウカラガンの保護のことで話し合った。この日も5月としては異常な暑さだった。  
(竹下信雄)

## ◎ 第1回モズシンポジウムを開催 ◎

1983年1月8日(土)～9日(日) 長野県伊那市の「市営羽広荘」で、第1回モズシンポジウムが開催された。山岸哲氏・小川巖氏両発起人の呼びかけに、北海道・東京・千葉・長野・神奈川・愛知・徳島・三重・大阪の各地からモズ研究者13名が集まり、各自のフィールド紹介や情報交換を行った。

1月9日の研究発表のテーマは、真野徹「モズの換羽について」、中村雅彦「モズ・アカモズ共存地における両種の種間関係」、山田拓「モズのはやにえ」、小川巖「モズ類の食性の検討」、記念講演として山岸哲「都市公園におけるモズの生活史」、が行われた。また予定プログラムにはなかったが、小島治好「長野市東部平坦地における初冬のモズの分布」、唐沢孝一「モズのひろい込み(擬声)の紹介—NHKラジオ“自然と共に”1982年11月14日放送の録音」が追加された。

南北に長い日本列島に広く分布しているモズの場合、生活の地域差が大きく、自分のフィールドだけの結果から独善に陥らないためにも、各地から情報をもちよることの意義は大きかったといえる。今後、いくつかの共通したテーマで研究しようということで第1回を終えた。また、モズ以外の鳥類についても、いくつかの研究グループが次々と結成され、日本の鳥学を活性化させる気運が感じられる。こうした研究者グループが学会の全国大会を利用して小集会を催すことも、学会にとって大いにプラスになることと思う。

なお、モズシンポジウム事務局は下記のとおりである。

〒061-21 札幌市南区常盤5-51 小川 巖 方

「モズシンポジウム事務局」 Tel. 011 (591) 2038

(唐沢孝一)

## ◎ 第2回鳥類談話会の開催 ◎

北海道東部（十勝，釧路，根室，網走東部）の鳥学会，日本野鳥の会会員有志が集まって，第1回の談話会を昨年9月に行ったが，今年は第2回目を9月25，26日に帯広で開催した。根室，網走からは他行事とかさなったために参加者がなく，今回の参加者は十勝・釧路の11名であった。

今回は2回目でもあるので，研究紹介も加えた。発表は次の3題である。飯嶋良朗：十勝のタンチョウについて，橋本正雄：釧路湿原のアオサギ・コロニー，平沼裕：池田町キモントーの鳥類。この他に藤巻が第18回国際鳥学会の様子を報告した。今回研究紹介した人の中には，本業のかたわら鳥類観察を行っている人もいる。これは趣味としての野鳥観察の域を出，目標をもって調査をするような人が徐々に増えてきていることを示すものであろう。

来年は第3回目を釧路で開催の予定である。

（藤巻裕蔵）

## ◎ 鳥学会各賞の種類と選考方法 ◎

学会の賞の種類や目的については，評議員会で過去何回にもわたり討議してきたが，結論の出ない部分も多く，今後共継続審議することになりそうです。しかし，当分の間どのように賞が決定されるか，ここ数年の論議をもとに，およその現状を会員諸氏にお知らせします。

### (1) 賞の種類と基準

- ① 学会賞（生涯かけた研究のまとめで，学問的に優れた業績。めったに出ない。）
- ② 鳥学研究賞（多年の観察結果をまとめたオリジナル性の高い論文，年0～2名程度）
- ③ 奨学賞（新人賞的な性格をもち，年齢は問わない。過去1～2年の優れた論文を対象とする。人数は問わない）
- ④ 表彰状（鳥類保護活動，多年の研究活動，写真，録音等の技術開発など，鳥学発展への寄与。回数は問わない）
- ⑤ 感謝状（多額の寄付，会務・学会への協力等学会への功績に対して。回数は問わない）

### (2) 選考方法

評議員会で検討し決定する。なお，昭和58年度より選考の際には次の点を考慮することになった。

- ① 受賞対象者は学会会員に限る。（感謝状の多額の寄付を除く）
- ② 対象論文として，学会誌「鳥」に掲載されたものを重視する。

賞のあり方やその種類，基準については評議員会で今後も検討を積重ねる予定です。会員諸氏の御意見もお知らせ下さい。

（唐沢孝一）

## ◎ 出版物のお知らせ ◎

下記の出版物は入手することができます。本会事務所宛直接注文して下さい。値段は送料込み。

- |                                 |                           |
|---------------------------------|---------------------------|
| ① 日本鳥類目録改訂第5版（英文・和文・補遺，1974）    | 8,000円                    |
| ② 南千島の鳥類（和文，ネチャエフ著・藤巻裕蔵訳，1979）  | 2,000円                    |
| ③ 世界のオウムとインコ（和文，黒田長禮著，1967）     | 5,000円                    |
| ④ ミズナギドリの系統（英文，黒田長久博士学位論文，1954） | 2,500円                    |
| ⑤ ジャワの鳥類Ⅰ.スズメ目（英文，黒田長禮著，1933）   | 2,000円（会員）<br>2,500円（非会員） |
| ⑥ 学会誌「鳥」 93/94, 95/96, 97/98号   | 各 3,000円                  |
| 99, 100号                        | 各 2,000円                  |
| 26 - 30巻                        | 各巻 4,500円                 |

なお、「鳥」60-87号のバックナンバーは、絶版または残部僅少の号が多いので、購入希望者は事務所に問合せて下さい。また、日本鳥類目録第1版および世界のジャコとウズラは絶版となりました。

### < 名簿の訂正 >

1981年4月発行会員名簿2ページ。下記のように訂正して下さい。

岡 薫高（誤） → 岡 董高（正）

### < 新幹事紹介 >

学会の事務処理は各幹事のボランティアに支えられています。今年1月より東京大学農学部森林動物教室の石田健氏に新幹事として加わっていただきました。担当は例会など。

### < 編集後記 >

甲府・新潟・帯広・筑波・仙台など、鳥学会大会に出かけるたびに、現地実行委員長を始めとする多くの人々の心温まるもてなしを受け、やはり参加してよかったとその都度思っています。発表数も年々増加、内容も多様、若手研究者の台頭に熟年層も刺激されたり、研究グループ形成の気運も各地にみられ、鳥学発展が期待されます。今後共、会員相互の情報伝達のために、鳥学ニュースを大いに御利用下さい。（編集人 唐沢孝一）